

Nakagawa Tadaaki Kensei Tsushin

中川 ただあき 県政通信

Water[水]

[新春特別号]

●発行日＝平成15年1月1日

●発行所＝中川ただあき後援会事務所



森 雅志

Masashi Mori

富山県議会時代、同じ釜の飯を食った仲の二人。
いま、森氏は富山市長に、中川氏は県議二期目をめざす。
多くの難題が山積している現在、
ある意味では県と市とが歩調を合わせなければ
打開できない問題が数多くある。

新春対談

二人は、どのような政治理念・信条をもって
これに立ち向かうとしているのか。
二〇〇三年、新しい年を迎えるにあたり、
これからの富山があるべき針路について、
互いの立場から大いに語り合った。

中川 忠昭

Tadaaki Nakagawa

今こそ、農業生産の基盤を整備し、将来に備える時。

県独自の発想と責任で 思い切った施策展開を

中川 市長になられ、はや一年。ますます意欲満々で実に頼もしい限りです。

森 やりがいや充実感を強く感じる反面、孤独感に襲われることもありますよ。何事も最後は自分の決断にかかっていますから。

中川 県議時代とは違うよね。24時間拘束される立場だし、言いつ放しは許されない。

森 いま行政に必要なのはスピード感です。議論ばかりして、なかなか結論が出ないという体質がまだ残っていますからね。

中川 (担当者) 最初から百点を取ろうとする所に無理がある。ある程度、方向性が出たら、とにかく着手していかないと。

森 そこで、新しい年の行政目標として「スピード感」と「THINK BIG(大きく考える)」の2点を掲げているんです。閉塞感がある今の時代、縮こまっていたはいけないと思う。

中川 これは日本全体に当てはまることだけ、リスクに対する挑戦に腰が引けてしまっている。いわば責任回避の構造。しっかりと自己責任を持って進めないと、いつまで経っても地方分権などおぼつかない。とにかく、今年は原点に戻り、新しいものを創造するんだという意識でリスクへの挑戦を求めたいし、自分の基本としたい。

森 やはり組織内の分権と、職員各自の自主性が大切ですね。壁にぶつかってもあきらめることなく、過去の慣習を乗り越える努力をしないといけない。

中川 県にしても、知事に届くまでのステップが多すぎる。だから末端の生の声が伝わりにくい。

このままでは県民は負の財産を抱えてしまうのではないかとという危機感を覚え、行政の仕組みが分かっている自分だったら改革できる部分があるんじゃないか、と思ったのがそもそも議員を志した動機でもあったわけだけども。

森 国会と違い、地方議会は権能が限られている。予算の議決と額の修正ぐらいで、新しい費目をつくるのは不可能ですからね。

中川 要するに地方議員は行政のチェックマンでしかない。意見や要望を反映させる条例づくりという役割はあるにしても、国が細かいところまで口を出し過ぎる。大枠だけ決めて、後は地方の実情に任せてくれればいいものを。やり方が汚いよ。(笑)そのためにも県議会に責任ある権限を与えてもらう改革が必要だと強く感じており、なんとしても実現させたいと思う。

森 知事の権限が広がったといっても、国の省庁の意見を聞くという実態は変わっていない。相変わらずの通達行政がまかり通っている。これは日本全体の仕組みとして声を大にして変えていかないと、新しいことは何もできないと思う。

中川 戦後の混乱期にはそれが必要だったかも知れないけれど、今は地方も自立してきたんだから。県自らの責任において、県独自の発想で思い切った施策が展開できる県にしなければ、と切実に感じますね。

都市生活者と農山村との 交流を大いに進めよう

最近とくに思うのは、県も市も農政にもっと力を入れるべきだということ。つまり農業が50年先までも持続的に続くような施策こそ、いま大事だと思うんです。

中川 同感ですね。農業は国民への食糧生産の場として、必ず守っていくことが必要。また、多面的機能をもち農山村がなければ、国民は生きていけないことも胆に命ずるべきです。このことを都市生活者に理解してもらいたい。最近では、殺伐とした都会生活を離れて農山村で働きたいという傾向が強くなってきた。こういう古里への回帰願望は、たいへんいいことだと思う。やはり水と土とが織りなす自然の二員としての人間の本能というか、DNAが働いたということじゃないかな。

森 おつしやる通り。太陽の下で、いい汗をかき、人生を楽しむ。都市生活者が農村での農業体験を通して、癒しや生きがいを求めている時代ですよ。21世紀の産業を考えた場合、福祉や生涯学習の領域と並んで農業がある。そこで、農場を有料で提供し、週末に滞在型農業を楽しめる、いわゆるグリーンツーリズムを実現できないかと考えているんです。

中川 以前に「農業を定年退職して百姓をやりたい」と言った人がいて、その発想に感動したことがある。確かに、専業農家にも定年があつていいはず。そのくらい農村には奥深く、人を豊かにするものがあるということだろうね。そんなことから今、県議会では都市と農山村との交流を大いに進めよう、そして農山村の活性化を図ろうということで、県議会初の試みとして二月議会で議員提案条例の制定に向け、われわれが中心になつて準備しているんです。森さんにもぜひ協力してもらいたいですね。

森 それはたいへん素晴らしい。食糧安保の側面から考えても、アメリカは食糧自給率が約三〇%、オーストラリアなどは三〇%を超えている。だから、その一〇%を超えた部分を日本が買えというが、実はこれほど危険なことはない。地球規模の食糧難は確実に拡大し、深刻化しているんです。そのためにも、富山でも中山間地を含めて圃場をしっかりと維持し、農業生産の基盤を固めておかねばならない。

中川 それが基本ですよ。農業をやれるのは一人せいぜい50年、代が変わっても生産できる基盤を後世にいかにつぎ継いでいくかが大きな課題。多面的な機能をもつ農業生産基盤の維持には、国民全体のコンセンサスが必要だと思っし、



森 雅志・もりまさし

昭和27年8月13日生まれ。呉羽小学校、呉羽中学校、富山中部高校を経て、昭和51年中央大学法学部卒業。昭和52年森雅志司法書士事務所開設。平成5年富山県司法書士会長。平成7年から富山県議会議員当選2期。平成14年富山市長当選。現在に至る。

何といつても地産地消が最も大切だと思う。

森 消費者は、安全で新鮮でおいしい物を求めている。ところが、流通業界が求めているのは等質で大ロットの生産物。まさに消費者と生産者の間にギャップが生じているわけです。そこで海外から農産物を輸入するというのが現在の図式だが、そうではなくて、あくまでも地産地消が農業政策の基本だと思うんです。

中川 まさしく、それが原点。人が生きていくうえで農作物は欠かせないから、農家と農山村を切り捨てる施策は許されない。そのためには県民全体の理解が必要で、特に子供のころからの教育が不可欠だと思う。だから子供たちにぜひ農業体験をしてもらいたい。作物を育てることによって収穫の喜びを学び、感謝の気持ちを養い、自然とふれあう中で生命の大切さを実感できる。これほど適した教育の場はないと思う。その意味で農業・農村体験教育を基本にしてほしいね。

相互扶助精神に基づく 真のコミュニティ形成へ

森 最近、都市間競争ということが盛んに言われるけれど、街にはそれぞれの方向性があるとい

いわけで、何も競争する必要はないんじゃないかと思う。例えば、富山の人が金沢へショッピングに行く。その代わり金沢の人も何かを求めて富山に来る。もちろん都会に住む人たちも富山に来る。そんな個々の魅力づくりに県を挙げて取り組むべきですよ。先ほどの農業体験を例にとれば、農業がこの社会を支えていることを都市生活者にも実感してもらうことが大事だと。

中川 都市化が急速に進んだために、市内の農業用水路はあちこちで寸断され、水路があつて



中川忠昭・なががわただあき

昭和25年3月1日生まれ。山室小学校、山室中学校、富山高校を経て、昭和47年新潟大学農学部卒業。昭和47年富山県庁入庁。富山県東京事務所係長、氷見市農地林務課長、農林水産部耕地課主幹、企画管理課主幹などを経て、平成10年富山県庁退職。平成11年富山県議会議員当選。現在に至る。

も水が流れなくなった。用水路は、体というならまさに血管。生命や地域を支えてきた水と接する機会が少なくなり、水の恵みがわからなくなつた。水は環境の原点。だから、水が循環することの大切さを肌で感じてもらうような街づくりを基本に考えないと。

森 だから地下水の枯渇が問題になつていても、冬になると各地で融雪装置を作れの大合唱が始まる。幹線道路はともかく、側道や歩道ぐら

いは地域で協力して除雪できないものかと思うんですがね。

中川 私らの小さいころは、父親が家の前の道を除雪してくれた。親ならば、(行政に頼る前に)子供の通学路の除雪など当然のことだと思うけどね。

森 自然発生的に生まれた集落が日本社会の原点であつて、それは相互の助け合いの精神で支えられていた。ところが時代の変容や価値観の変化から、住民意識の中で本来のコミュニティに対する帰属意識が薄れてしまったように思うんです。21世紀型の産業構造に転換し、新しい日本の社会に移行しようという時期に、このままで

は取り残されてしまう。ここは、みんなで考えないといけないテーマだと思えますね。

中川 従来のムラ社会は、みんなで協力し合つて成り立っていた。それが今の時代は、お金を払えば済むだろうという考え方をする人が増えているよね。時間はあるのに、地域のために働く労を惜しむ。おまけに自分たちでやろうとしないので、最初から行政に依存してしまう。いくらお金を

出しても汗をかく人がいなかったら地域は良くならないわけだから、自分が住んでいる地域にもつと愛着を持つてほしいと思うね。だから、こういう考えが持てるように、森さんにぜひリーダーシップを発揮してもらいたい。

森 そういうあるべき社会の姿を取り戻すために、行政として相当の覚悟を持つて先導的役割を果たしていかなければと腹をくくっているんです。何かといえは「この不景気をどうしてくれるんだ」という不平ばかり。この不景気に打ち勝つために自分はどう考え、こうしたいから行政の助けを借りたいという議論なら、行政はいつでも手を差し延べられるんだけど。

挙げ句の果ては、「昔の議員さんは頼むと何で

もやつてくれたのに」と。(笑)とにかく、今の時代は「負担と給付」「自己決定と自己責任」が当然の原則。このことをきちんと語り、誘導していくリーダーシップが番大事なんだろうね。

市町村合併を進め 生活の質向上をめざそう

森 いま最も重要課題となつている市町村合併の問題でいえば、その意味合いをどれだけきちんと地域に説明し、説得できるかがポイント。文字どおり行政や地方議会議員の力量に掛かっていると云つていい。地域エゴとまでは言わないまでも、それぞれの立場からの主義主張がぶつかり合う厳しい仕事であるだけに、精根を据えて取り組んでいるつもりなんです。

中川 住民の立場にしても、誰かがやつてくれるだろう、ではダメなんです。自分たちの町や地域がどうしたら住みよくなるか、さらには生活の質をいかに向上させられるか、という視点が不可欠なこと。そういう住民サイドの動きを行政がどう後押しできるか、がこの議論の基本なわけですから。しかし、一地域だけの問題ではないので、周辺の市町村が「緒になつて考えよう」じゃないかと。要するに、合併問題は生活の質をグレートアップできる絶好の機会として、プラス思考で考えるべきだと思うね。

森 川下の都市生活者は、川上があつてこそ今日の生活がある。市民の生活環境を考えれば、広く周辺市町村を視野に入れた施策はある意味、当然のこと。今の合併問題もそうした観点に立つて議論すべきなんです。

中川 ひと昔前の大同合併とは根本的に意味が違うということ。これまでにいろいろな社会資本

技能・技術が、正当に評価される、社会の仕組みが重要だ。

整備が進められてきたけれども、県民の心は必ずしも豊かになったとはいえない。ならば、ゆとりや安らぎが感じられる真の豊かさを実現するにはどうしたらいいかという、われわれの生活に直結した問題なんだから。この辺りを市民のみなさんにキッチリと説明すべきだと思うね。

森 まさしくその通り。今のところ周辺市町村長との話し合いも着実に前進しており、十分な手応えを感じている。引き続き取り組みたい。

立山生かした観光振興と魅力ある街づくりを

中川 富山県の場合、滞在型観光客の誘致など観光面での取り組みがまだまだ不足しているね。切り札の一つに立山の借景があるのだから、空港や市街地からのルートに「立山街道」ぐらいあってもいい。ともかく立山連峰という大きな観光資源を前提に、どんな街がいいのかの発想がほしい。県には、全県域公園化構想というのがあって、具体化となるといま二つ。富山市にはぜひ、公園の中にあつたような街づくりを進めてほしいが。

森 まったく同感。富山駅を出たら、緑が豊かできれいな街だなと感じてもらえるような顔づくりがまず必要だと思っている。それと街の美化。オシャレなユニホームを着て中心市街地を掃除してもらおう、そんな若い人たちによるボランティア部隊を編成したい。いま事業化に向け、条例案の作成作業を進めているところなんです。

一方で、これが最も重要なところですが、これまで観光事業にかかわる業界内部での情報交換がほとんど行われてこなかった。市内にも紹介

する観光ポイントがたくさんあるのに、PR意識が欠如しているせいで「富山は何にもない所だから」で済ませてしまう。(笑)とにかく相互のつながりをもっと強化しなければ、と思つてます。

中川 来県したビジネスマンや観光客が空いた時間にちよつと富山観光でもと思つて尋ねても、「そりや、金沢でも行かれたらいいがでないがけ」と。(笑)もてなしの心が欠けているというのか、せつかくのお客さんを逃がしてしまっている。とにかくPR下手だね。

森 だから、PR強化のための仕掛けを考えているんです。つには立山の眺望をハイビジョン映像で、リアルタイムに市内のホテルで、常に県内観光地の紹介ビデオを流すことも、市の事業でやつてやろうと思つてるんですよ。

中川 どんどんやつてほしいね。中心市街地にしても、東京などのような過密な街でなく、清楚でにぎわいのある街づくりを考えてもいいんじゃないか。路面電車に工夫を凝らし、例えば馬車もあつたり。遊園地などもあつていい。とにかく大人も子供たちもゆつたりと楽しめる、どこにもない街づくりをぜひ実現してほしいな。

森 まず行政主導でやらないといけないのが路面電車の問題。バス交通と絡めた、30年先を見越した公共交通網の再整備が必要だと思う。ただ以前の路線を復活させる場合でも、道路の中央に電車を走らせることに對する市民のコンセンサスが絶対条件ですが、ともあれ商店街の活性化に向け、いろいろな仕掛けを計画している最中ですから、ま、乞うご期待といったところですか。

県政と市政の連携で県民の幸福を追求する

中川 いずれにしても、それは県の仕事だ、いや市の仕事だと張り合っている時代じゃない。県議会と市議会だつて同じことが言えるんじゃないかな。

森 そうそう。みんなで力を合わせ、同じ方向に向かつて着実に前進していければいいと思いますね。

中川 いつだったか、自分がこうと思つたら何かなんでも実行すると断言すればいいんじゃないか、と忠告したことがあつたよね。森さんには、持ち前の行動力で市政をぐいぐいと引っ張つてほしい。

森 ぼくらの年代は、まさしく働きざかりの世代。だから、中心になって頑張るのは本来的な姿だと認識してます。その点では県議会も世代の近い人が増えてきて、古い慣習にとらわれずに一致協力して取り組もうという空気が出てきましたね。

中川 当たり前のことが、当たり前のように出て来る社会にしなければ、と思うんだよね。それが今なら出来る。例えばいまの日本では、技術者や研究者、優秀な技能を持つ職人が優遇されていない。資源のない日本ではモノづくりが基本産業なんだから、これらの人が正當に評価され、大切にされる施策をもつと積極的に打ち出すべきだと思う。そんなシステムが整備されれば自然と人も集まつてきて、産業に元氣が出る。その意味で、富山出身の田中耕一さんがノーベル賞を受賞されたことは実に喜ばしい。

森 産学官の交通整理を進めないといけないで

すね。アイデアはあるが技術がない、あるいは技術はあるが販路がないといった企業同士のマッチングを図るとか。

中川 これをやらないと優秀な頭脳がどんどん海外へ流出してしまう。それに伴つて特許なども流出する。国にとっては大変な損失ですよ。県では新世紀産業機構で担つていこうとしているが、現実はまだまだ。もつと思ひ切つて、人と金を投資することが必要だと思う。

森 その点では、市としてもやれることがあるんじゃないかと思う。例えば、即戦力になれる人材を養成する、実学教育に特化したビジネススクールの設立。経済界と協力し、公設民営でそんな学校を市中心部につくれないかと考えているんです。

中川 それはいいアイデアだ。企業にとつても社員を再教育することになれば、それ相当の投資が必要になるわけだし。これからは県政と市政ががっちりスクラムを組んで立ち向かえば、具体化できる計画がいっぱいあると思うね。

森 これまでも中川さんとは常々、情報交換しながら、またいろんな面で相談にも乗つていただいている。特に農業問題では、互いに農家出の者として共感できる部分も多い。これから力を貸してください。

中川 とにかく今、一番われわれに求められていることは、農業や福祉、教育などいろんな分野について、なぜ改革が必要なのか原点に戻つて思い切つた施策を打ち出し、勇氣をもつて実行すること。森さんとは年齢も近く、県議時代から波長が合うと思つています。互いに県民・市民の幸せを願う気持ちには、まったく変わらない。肝胆相照らす仲として、今後ともよろしく。

